チベットにおける宗教的人間形成(1)

―― H.V.Guenther の理解(1)に基づき ――

橋　本　芳　契

目　次

1　はじめに――東洋学の進展
2　西蔵大蔵経の成立経過
3　Tibet 顕教の新研究
　― H.V. Guenther : Tibetan Buddhism without Mystificationの構成 ―
4　人間の真形成と仏教

1　はじめに――東洋学の進展

予の，生来はじめてチベット（Tibet, 西蔵。(2)以下 'Tibet' に従う）のことを耳にしたのは，すでに55年近い過去のことに属する。(3) Tibet はインド Himalaya 山脈(4)の北に位置し，同山脈の南に位置する Nepal 王国と同様に外人を入れない秘密国としてこれまで長く最も外部に知られない国であった。それが中国の政治的大変革により，先年中共に併合され今夏には遂に地方自治区共産主義委員会を設置せしめられるに到った。(5)Tibet は「世界一の高原」で，谷底で標高 2,500 m 内外であり，ただ谷地だけがところどこ耕地となり，小集落を形成するだけで，他は一面の森林地帯か大草原である。従って生活的にも文化的にも最も不遇不利の条件下にあった。言葉はあっても文字はなく，漸く 7 世紀の Tibet 王 Sroṅ-btsan-sgam-po（ソンツエン・ガンポ）の時に至って India の Sanskrit に倣ってはじめて Tibet 文字を制定したほどである。(6) しかし，このソンツエン・ガンポ王は Tibet 開国の英主と称される文化的大恩人で，Nepal から妃 Bhṛkuti, 唐から文成公主を迎えたが，いずれも篤信の仏教徒であったため，その感化で強力に Tibet に仏教を迎え入れることになったものである。Tibet には仏教以前からボン教（Bon, 笨教・梵教・凡教とも書く）なるものがあったのであるが，きわめて程度の低い呪術的な宗教で，社

会的弊害も少なくなかった。(7) そこで王は人民の幸福と民族文化の刷新向上のため，積極的に India から仏教を採り込み，これによって民族将来の社会的繁栄をもたらそうとしたのである。そして王によるこの企画は美事にみのって，現にわれわれが『西蔵大蔵経』に見出すようなすぐれた内容の宗教的思想文化を形成し得たのである。しかし，Tibet 人の民族的性情が閉鎖的，つまり非開放的であり，異民族に対して極端に懐疑的もしくは排他的闘争的であったから，他国民はこれまで容易にこれに近づけず，従って Tibet 文化そのものも殆んど外部に知られること無くして数百年の年月を経たが，いまは政治事情も異なって来，とりわけ過去半世紀間中に次々に日本の仏教学者がいのちがけの Tibet 入国と同国に秘蔵されていた写本仏教大蔵経の持ち出しに成功して，内外の仏教学者は今日では安らいだ心で Tibet 仏教の研究に専念しはじめている現情である。ここではそうした Tibet 仏教研究の具体的一事例として Canada 国の Tibet 仏教学者 Herbert V. Guenther（ヘルベルト・V・ギュンター）教授にすぐれた新著のあることを紹介し，研究報告にかえることにしたい。

2　西蔵大蔵経の成立経過

中村元教授は，『東洋人の思惟方法』第二部（日本人・チベット人の思惟方法）中の「第五篇〔附論〕チベット人の思惟方法」第2章で，「諸文化現象，殊に仏教の受容形態にあらわれた思惟方法の特徴」として，

1. 個人的な人格的結合の意識の稀薄
2. 宗教的権威ある特定個人に対する絶対的帰投
3. ラマ教の社会的秩序に対する絶対的服従
4. シャマニズム的傾向
5. 論理的性格

の5点をその代表的なものに数え，且詳細に説明していられる。(8)

Tibet の特異な文化は，その風土的環境に負うところが少なくない。Tibet は天然の秘密国である。そのような風土と自然環境とがさきのようなボン教を発達させてきていた。ボン教はすなわち Shamanism の一種で，シベリア，中央アジア，東・西トルキスタン，蒙古，満州，シナから朝鮮，北日本一帯に広がっていた原始未開の呪術的宗教である。その考察は宗教学的におのずから別になさるべきであるが，(9) 中村教授が最初にご列挙の3点は実は一連の内容の

もので，同教授自身も，「人間の形成している人倫的組織のうちで最も閉鎖的なものは家族であるが，チベットでは歴史以前の時代から今日に至るまで，家族については奇異な習俗が行われている」(10)とし，それは何であるかというに一妻多夫の風習で，その理由として青木文教師が掲げた二点を紹介している。すなわち，(1) Tibet は不毛の地で，人口が増大するのを阻止するため一妻多夫にした，(2) Tibet は山国で交通不便のため，官吏の転任や商人の旅行に家を不在にする期間が長いのであり，且 Tibet では婦人の社会的地位は低いけれども，家庭内での妻の権力は強く，実際上家長の地位にある，しかも長期に夫の不在中は孤閨を守る必要があり，夫の弟と同居する環境であるから，少なくとも上層家庭では一妻多夫が公認されていたというのである。なお反対に一夫多妻の例もあり，既述のソンツエン・ガンポ王にも5人の妻があったという。いずれにしても Tibet 人には生活共同体としての「家」の観念はあっても，男女個人の人格的結合の意識が稀薄であったことは事実のようである。そのことがひいて「宗教的権威ある特定個人」に対する絶対帰投の風を増長させ，やがてラマ教 (Lamaism) のごとき政教一致，または政教一本の宗教生活本位の社会態勢に追いこんでいったものというのである。Lamaism はその本をたずねれば仏教の Tibet 的変容といえる。(11)仏教は既述のようにソンツエン・ガンポ王の時 Tibet に初伝した。その後約100年を経て，チソン・デーツアン (Khri-sroṅ-lde-btsan)王(A. D. 755-781) が出るが，そのとき India から密教が迎え入れられた。いわゆる真言密教である。しかし残念なことに Tibet に伝えられた密教 (Esotericism or Esoteric Buddhism) は，現地の旧勢力に圧せられて腐敗堕落したものとなった。それを根本的に改革したのが，これから述べようとする14世紀から15世紀にかけてのツオンカパ (Tsoṅ-kha-pa, A. D.1357-1419) そのひとなのである。

なお，その前に中村教授が Tibet 人の思惟方法の一面の特色としてあげられた「論理的性格」というのは，既述の Tibet 文字を作成したトンミ・サンボータ (Thonmi Sambhoṭa, A. D. 7C.) が Tibet 語の根本文典をも作る，その学習を中心に仏教研究の基礎的教養としてラマ教僧院では約四年間の論理学履修が必須にされ，判断の表現形式に於ても Tibet のものは論理的精確さを期することが大きな特色となった，その方面を指して言われるものである。(12)そしてこの厳格な論理的体系的思惟方法は，India の大乗仏教の根本思想である「空観」の受容の場合等にも適用される。(13)

さて Tsoṅ-kha-pa（宗喀巴）のことを説くには，彼よりさらに二三百年

前の12 C. A. D. に Tibet に入って法を伝えた Indian 仏教僧 Atīśa (Dīpaṃ-karaśrijñāna) そのひとのことを予じめ述べておかねばならない(14) Tibet へ India の密教(Esotericism)を初伝したのは，Khri-sroṅ lde-brtsan 王 (754-797) の時，入蔵した Śāntirakṣita (寂護)，Padmasambhava (蓮華生) らであるが，密教の秘密法が Tibet の風土や習俗に合致して深くその地に根をおろすことになった。Khri-sroṅ lde-brtsan 王から2代の孫王 (Ral-pa-can, 815頃即位)の時，Sanskrit から Tibet 語に翻訳する時の訳語を一定するため，有名な『翻訳名義大集』(Mahāvyutpatti) が作られた。しかしこの孫王はその弟 (ランダルマ，836-841在位) に殺され，しかもその弟王は烈しい破仏を行なったから一時 Tibet 仏教は滅亡に近いかに見られた。しかし，不幸ながら，この弟王も間もなく殺されたから，再び Tibet に仏教が復興し得た。その頃に India から Tibet に迎えられたのが上記の Atīśa で，彼は乞われて『菩提道灯論』を著わし，戒律を厳しくし，僧侶の独身を定め，ボン教の儀式を排するなど，堕落した Tibet 密教を根本的に改革したのであった。その Atīśa を慕ったのが Tsoṅ-kha-pa なのであるから，彼の Tibet 仏教史，もしくはその文化的における地位の高さはおのずから明らかであろう。Tibet 仏教の基礎は彼によって真に確立されたと言ってよい。

西蔵大蔵経のことを語るのを趣意としながら Tsoṅ-kha-pa の紹介につとめたのは，彼がはえぬきの，しかも最もすぐれた Tibet 仏教学者として出る前後頃までに，India の経論がほぼその全部の Tibet 翻訳を完了し，(15) やがて次々にいわゆる『チベット大蔵経』(Tibetan-tripiṭaka) として開版される機運にあったからである。便宜上，その代表的なものの版名を表示してみよう。

〔西蔵大蔵の開版表〕

版　　名	目　　録	備　　考
(1)	デンカルマ Ldan-dkar-ma	9 C.(8C. 末になり断片的に作られた訳書目録を整備したもの)
(2) ナルタン (Snarthaṅ)古版	有	13C. 初 (木版)
(3) ナルタン (Snarthaṅ) 新版		ナルタン古版を 1410，1602 の各年に覆刻の上，1730年第7世 Dalai Lama の命で大改訂，以後の定本となる
(4) リタン (Lithaṅ) 版		ナルタン新版と同じ頃
(5) デルゲ (Sde-dge) 版		リタン版その他に基づく

(6)	至元法宝勘同総目録	元代の中国に Tibet 仏教たるラマ教が逆伝し，漢蔵両訳経本の比較が行なわれた(17)
(7) 永楽版		中国最初の西蔵大蔵経1480 A. D.（明代）
(8) 万暦版		明代
(9) 康熙版〔北京版〕		清代康熙22年（1684）～雍正２年（1700），この版は乾隆年間（1737）更に補修した
(10) チヨーネ（Co-ne）版		甘粛省で開版
(11) プナカ版		
(12) チヤムド版		
(13) ジエ・クンブム版		
(14) ラサ（Lha-sa）版 (18)		第13世 Dalai Lama の命で1920年に開版，但し同 Dalai が1934年に逝去のためカンギュル部だけで中止
(15) 西蔵大蔵経〔⑨北京版の影印本〕		日本の西蔵大蔵経研究会（会長鈴木大拙）で印刷，昭29-34，168vols. (19)
(16)	チヨーマ（1881），フイール（1881），シュミット etc. の編集	
(17)	P. Cordier : Catalogue de fonds tibétains de la bibliotèque nationale	Paris, 1909-1915（⑨北，丹）
(18)	H. Beckh : Vergeichnis der Tibetischen Handschriften der Königlichen Bibliothek zu Berlin	Berlin, 1914（甘）
(19)	河口目録	河口慧海著，昭３（②ナ，甘）
(20)	北京版甘殊薩勘同目録	大谷大学，昭７
(21)	西蔵大蔵経総目録	東北大学，昭９（⑤デ，甘，丹）
(22)	デンカルマ目録	龍谷大学（芳村修基），昭25
(23)	A Comparative List of the Bkaḥ-ḥgyur Division in the Co-ne	壬生台舜，Peking，昭34（大正大学紀要，No.44）
(24)	影印北京版西蔵経総目録・索引	昭36（甘，丹，続）
(25)	A Catalogue of the Tohoku Kuniversity Collection of Tibetan Works on Buddhism（西蔵撰述仏典目録）	東北大学，1953 (21)と一連のもの，(20)

Tibet 大蔵経は大別して，カンギュル Bkaḥ-ḥgyur（甘殊爾 Kanjur）とテンギュル Bstan-ḥgyur（丹殊爾 Tanjur）の2大部とする。前者は仏説部，後者は論疏部であるが，India や中国の経・律・論の三蔵（Tripiṭaka）に比較すると経蔵が前者，論蔵が後者に含まれるに対し，いま一つの律蔵は，(1)基本的典籍が仏説としてカンギュルに入れられ，(2)その註釈類がテンギュルに入れられるちがいがある。そして各部の細分や配列順序の版ごとに多少とも異なるのが「西蔵大蔵経」の特色であるが，一般としては，(甲)カンギュルを，(1)律・(2)般若・(3)華厳・(4)宝積・(5)諸経・(6)秘密の6部とし，時には(5)諸経から(7)涅槃の1部を独立させ，(乙)テンギュルを，(1)讃頌，(2)秘密，(3)般若，(4)中観，(5)経疏，(6)唯識，(7)倶舎，(8)律，(9)仏伝（本生），(10)書翰，(11)因明（論理），(12)声明，(13)医明（又は医方明），(14)工巧明（くぎょうみょう），(15)雑の諸部に分類する。(16)さらに大蔵経の収録部数も各版によって異なり，例えばデルゲ版では

カンギュル	100函	1108部
テンギュル	213函	3461部
合　計	313函	4569部

である。

さらに言えば，Tibet 大蔵経の大部分はインド Sanskrit 本からの翻訳であるが，少数の Pāli 聖典本や(17)それらの原典から漢語・于闐語・蒙古語等に一旦翻訳されたものが再び Tibet 語に重訳されたものも含まれている。そこに Tibet 大蔵経の資料的意義の学問上絶大なものがあるわけである。

3　Tibet 顕教の新研究

—H. V. Guenther: Tibetan Buddhism without Mystification の構成—

さきに述べた Tsoṅ-kha-pa（宗喀巴）には著述が大小合せて210種あり，それらは『菩提道次第論』『秘密道次第論』の二大主著をはじめとして，顕密両教にわたる諸註釈，礼讃文，祈祷文，教導書，書翰，覚書，秘密儀軌，成就法 etc，を含んで，いわば「ツオンカパ全集」の体裁を成すべきものである。中でも上述の二大主著は，それぞれ顕教・密教の教学の諸流を綜合統一した最も教学的権威の高いものである。およそ Lamaism においては，Tsoṅ-kha-pa（1357-1419）に至るまでの思想的系譜は，次の三種の相承として伝承されたという。すなわち

(1)　文殊（Manjuśrī）—龍樹（Nāgārjuna）……と伝えられた甚深観派（Zab-

mo lta-ba)

(2) 弥勒（Maitreya）—無着（Asaṅga）……と伝えられた広大行派（rgya-chen spyod-pa）（以上両派は顕教）

(3) テイロ（Tillo）—ナーロ（Nāro）…と伝えられた加持祈祷派（ñams-len byin-rlabs）（この一派は密教）

の三流派である。そして Tsoṅ-kha-pa の『菩提道次第論』（Byaṅ-chub lam-gyi rim-pa）いわゆる「ラムリム」（Lam-rim）には前二流（顕教）の思想的統一綜合が企てられ，第二の『秘密道次第論』（Rgyal-ba khyab-bdag rdo-rje-ḥ-chaṅ chen-poḥi lam-gyi rim-pa）(21) いわゆる「ガクリム」（Sṅags-rim）には第 3 流の密教を主題としながら，顕密両教の綜合が意図された。Tibet の仏教と言えばその凡てが密教であるかの如く考えられ，Lamaism は甚だしく誤解されている。これらの誤解を除き正伝の Tibet 仏教を明確にすることが近代の内外の仏教学者における大きな研究上の努力目標になってきている。外国では早く E. Obermiller が 1935 年に Tshoṅ-kha-pa, le paṇdit（Mélanges chinois et bouddhique Ⅲ）を出し，近年にはイタリーから C. Tucci 教授が三部の大作 "Tibetan Painted Scrolls"(22)を出した。また国内では京都大学の長尾雅人教授が戦後間もなく『西蔵仏教研究』(23) を出版されて何れも大きく学界を稗益している。長尾博士はその著の「はしがき」において

> ツオンカパ（宗喀巴）の『ラムリム』（菩提道次第論）という書物の重要さが知られ出したのは，必らずしも新らしいことではない。だが私にとっては，その西蔵文を実際に読みまた訳して見るまでは，それのほんとうの価値は知られていなかったといってよい。

と語り出し，さらに「中観哲学といふ様な，仏教の根本義でもあり，難解ともせられるものが，かくも精細にまた平易にこゝに取扱はれてゐることは，一つの驚異であった。然し更にまたそれが，印度から西蔵へかけて十数世紀間の大きな思想の流れに於ける，ある帰結を示すものであること，そこには幾多の思想類型が層をなして保存せられてゐること，またそれが中国・朝鮮・日本に於ける三論宗的な中観仏教とは，よほど違った性格を持ってゐること，などに気づくに及んで，之を学界に紹介すべき必要と義務とを感じたのも当然であろう。」とのべ，「かゝる西蔵仏教は，単に西蔵仏教という地方的な意味でのみ処理せらるべきではない。より広く印度学的な，或は仏教学全体からの，考察と吟味とを要求する性質のものだからである。」と Tibet 仏教研究の学問的な意義の重大さを極言していられる。直接には松本文三郎（金沢出身・四高は西

田・鈴木両博士と同期）榊亮三郎両京大教授らの置礎の上においてであるが，そこには同時に奈良・平安以来の，溯れば聖徳太子以来の日本仏教の学問的伝統の重みと確かさとが現代としてはむしろ international な権威と重要さとにおいて反映せしめられているのである。しかも長尾教授は決して「三論宗的な中観仏教」を拒んでいるのではない。それどころか，日本が現在国際的に位置したその学問的境位において，世界の何れの国，何れの民族にもまさって具体的にはこの「中観仏教」の思想的命脈を開拓し保持する責任と義務とのあることを強調されたものと見てよかろう。(24)

Tsoṅ-kha-pa の「ラムリム」には大小の2本がある。すなわち，

大本：Skyes-bu gsum-gyi ñams-su blaṅ-baḥi *rim-pa thams-cad tshaṅ-bar ston-paḥi byaṅ-chub* lam-gyi rim-pa.（三士の受容すべき全次第を明示する菩提道次第）

小本：Skyes-tu gsum-gyi ñam-su blaṅ-baḥi *byaṅ-chub* lam-gyi rim-pa. である。大本は著者46才の時，Lha-sa 北方のレティン寺で作り，小本は53才以後，ガンデン寺で前者の略本として著わしたもので，内容の順序次第は全く同じいといわれる。(25) なおレティン（Rwa-sgreṅ）寺というのは，もと甘丹派（Bkaḥ-gdams-pa）の本山であったが，のちゲールク派（黄教）に属した寺であり，ガンデン寺は Tsoṅ-kha-pa がラマ教改革の拠点として建てた所である。そこに彼の勢いと信念を見るべきであろう。『菩提道次第論』では修学者の段階を下・中・上の三士に分け，順次，人天乗（世間の学）と二乗（声聞・縁覚）および大乗（ボサツ道）を修めるべきものとする。とりわけ「上士」のための大乗道が中心になるもので，(1)発ボダイ心，(2)六波羅蜜，(3)四摂法を詳説する。中でも六波羅蜜中の第五の「止」śamatha と「観」vipaśyanā が要論の部分と見られる。「止」はすなわち禅定であり，「観」はすなわち般若である。(27) Tsoṅ-kha-pa の密教に関する代表的著作『秘密道次第論』も441枚から成る浩瀚な書であるが，そこでは大乗仏教に波羅蜜多宗（Pāramitāyāna）と密呪乗（Mantrayāna）との2つあることを挙げ，さらに後者に kriyā（作），caryā（行），yoga（瑜伽），anuttarayoga（無上瑜伽）の4部門の次第のあることが説明されている。中でも後の2部門が重要であるというのである。

筆者が最初にのべたような因縁で入手した Tibet 顕教の新研究書 "Tibetan Buddhism without Mystification" は，もともと予の Tibet 仏教の理解や研究そのものが未熟浅薄であるためと，入手以来日数があまり経たないためもとより不十分千万であることを恐れるが，前来記した Tibet 仏教の教学上の発

達経過に参照すると，最も大胆に言って宗教的人間形成（religious human-formation or human-formation by religion）ということがその中心問題になっていることのようである。(28) 同書の Preface によると，1961（昭36）年の大学夏季休暇に Tibet を訪ね，当時の His Holiness the Dalai Lama に会った時，ダライラマは，Tibet 仏教がいま世界に大きな誤解を受けていることについて深い慨きの念を懐いていることを訴えられた。それを原文どおり示すと，

> He（註，ダライラマ）complained that much of that which purported to be information about Buddhism in Tibet was pure fancy and catered for the mystery-monger rather than for the earnest seeker of religious experience or the critical student of philosophy and that its rich symbolism, especially that of the Tantras, continued to be misrepresented grossly. (Preface, p. Ⅶ)

と言って，密教にも問題があるが，基本的には宗教的な敬虔な人生体験と Tibet 顕教の現代西洋哲学の立場からの解明が必須であるとしているのである。そしてダライラマは第8世 Dalai Lama の師匠（tutor）であった人の書いた4種類の小論文を著者に貸与してその研究を奨めた。その Tibet 文字によるテキストがこの書の巻末に付載されているのみならず，著者はその全英訳を本書の第2部として収蔵している。その訳題と Tibet 原文の枚数を以下に列挙してみよう。

1. The Gold-Refinery bringing out the very essence of *the Sūtra and Tantra Paths* …… 22葉
2. The Specific Guidance to *The Profound Middle View* or the direct Message of Blo-bzang(29) …… 29葉
3. The Secret Manual revealing *the innermost Nature of Seeing Reality* or the Source of All Attainment …… 12葉
4. The Instruction in the Essence of *the Vajrayāna Fath* or the Short-cut to *thePalace ofUnity*(33) …… 16葉

これらの4篇中，第一は経（sūtra）とタントラの本質を論じ，第二は特に顕教中の「中観仏教」を要道として示し，第三は仏道成就（宗教的人間形成）のための要諦を掲げ，さらに第四は金剛乗（Vajrayāna）を説いたものと考えられる。厳密には長尾教授の前掲書の『菩提道次第広論』毘鉢舎那章和訳(31)等に参照して精確を期すべきであるが，今はその余裕と整備を有しない。しか

し顧って思うに，この書として最も注意すべきは，やはり「仏道」(Buddhist Way) と題した第1部であろうし，そこに著者としてのさきの Dalai Lama の好意と期待への応酬があったのであろう。

4　人間の真形成と仏教

日本人として初めて入蔵したのが河口慧海であることは既述した。この人は慶応2年和泉国（大阪府）堺町北旅籠町の生れ，15才で漢学を修め，17才得度，明治21年東京哲学館（東洋大学）に学び，23年黄檗宗羅漢寺を董したが，1年にして退院，27年（America の Chicago で万国宗教博覧会が開かれて釈宗演等が渡米した翌年）釈雲照に師事し，釈興然について南方仏教を学び，仏教原典入手の必要を痛感して Tibet 入りを志し，30年6月神戸を出発，Tibet 国境に近い Darjeeling に滞在して Tibet 語を習い，32年（1899）1月，遂に単身 Nepal の Dhaula-giri 付近の間道から危険を冒して入蔵したものという。(32)自ら Tibet名を 'Śes-rab rgya-mtsho'（慧海）と称し，Sera 寺の学院に入り，ラマ教を学ぶのであるが，国籍が発覚して purge され，在蔵5年にして India 経由明治36年5月に帰朝し，時事と朝日の両新聞に「西蔵旅行記」を連載して世人を驚かせた。何ほどかの Tibet 品を将来していたので明治37年「将来目録」を刊行し，同年9月再度入蔵の途に登り，Nepal で梵文仏典写本を蒐集，大正2年入蔵，漢訳黄檗版大蔵経と Tibet 訳刊本大蔵経交換の班禅喇嘛(33)との先約を果し，また Dalai Lama からは東京大学へ寄贈すべき Tibet 訳写本大蔵経を委託され，更に他版の大蔵経はじめ，仏像・仏画・法器等，並びに地質・動植物の標本等まで蒐集持参して最初に述べた如く大正4年8月に帰朝したのであった。(34) その後慧海は東京宗教大学（大正大学）に出講し傍ら Tibetan と Sanskrit の仏典等を翻訳し，且社会的には仏教宣場会の結成指導等に尽力し，自らは大正15年1月の還暦に際し，具足戒を棄捨し「在家仏教」を提唱した。(35) この後昭和10年北京より内蒙古を踏査し，晩年には東洋文庫にあって蔵和大辞典の編纂に従事し，終戦の年2月24日81才で歿した。(36)河口の後にも入蔵し，もしくは渡欧して Sanskrit に併せて Tibetan を修めた日本の学者は数多いのであるが，今特に慧海についてのみ詳記したのは，彼が本邦の Tibetology の開拓者であるのみならず，大蔵経はじめ多くの Tibet 資料を将来し，且これを日本の風土に生活的に移し変えようとする程，Tibet 仏教に対し終始一貫した信念と情熱の持主であったからである。(37) 転じ

て慧海の入蔵以来半世紀を隔てた現代の Tibetan Buddhism 研究者であるさきの Herbert V. Guenther の 'The Buddhist Way from original Tibetan Sources' と sub-title した "Tibetan Buddhism without Mystification" の残りで而も最初の部分である第1部を見るに，次の5章から成っている。

1. Man—His Uniqueness and Obligation
2. Different Types of Man
3. The Divine in Man's Life
4. The Path and the Goal
5. Pāramitāyāna and Mantrayāna

これら5章こそはすなわち著者の Tibet 仏教研究の成果であり，その総精算と考えてよく，西洋哲学との比較対照においてさまざまのすぐれた近代的な新見解が見出されるのであるが，そのうち最初の3章は何れも 'man'（人間）の観察に関したものである。すなわち，第1章は人間の個別的な人格性とそれに伴う道徳的義務をのべ，第2章は人間に賢愚・善悪・優劣の差等があると同時に社会的に見て上層・中層・下層の階層的区別がある事実を指摘し，さらに第3章ではそうした個人的区別にも拘らず，人間的生命（man's life）の尊厳，宗教的生命観としては「仏性」Buddhaheit（成仏への可能性）が具わっていることを明確にしようとしている。従って続く両章は，そういう人間の人格的完成への行道（the path）とその達成目的（the goal）とを詳細に説き，最も具体的に般若乗（Pāramitāyāna）とマントラ乗（Mantrayāna）との対立と綜合において大乗仏教の極意を語ろうとしているものに他ならない。両乗の対立はすなわち顕教（Exotericism）と密教（Esotericism）との区別でもあり，或は教相と事相とのちがいと称してもよく，さらにそれらの綜合という所にこそ金剛乗（the Vajrayāna）の道行と真言密教が極意とする maṇḍala（the-Palace of Unity）の世界の実現があるのであろう。この書が繰返して用いるのは 'loving-kindness and compassion' の語であって，これは漢訳の「慈悲」（karuṇā）とか「大悲心」（mahākaruṇā-citta）ということに他ならない。(38)

ギュンター（Guenther）教授の新著そのものの内容的研明は引続き行う予定であるが，ともかく Tibet で現在まで研究されてきている代表的仏教学派は顕教としては次の4派であるとする。

I Vaibhāṣikas（分別説部）
II Sautrāntikas（経量部）
III Vijñānavādins（唯識学派または瑜伽行派）

VI Mādhyamikas（中観学派）

そしてこれらの学派は現代の西洋哲学に参酌して言えば順次，次の如く理解されるというのが著者の見解である。

I a naive realism （素朴実在論）を represent する

II a critical realism（批判的実在論）である

III 西洋哲学における the idealistic-mentalistic thinkers（観念論的一精神主義者）に極めて類似したものである

IV nothingness（no-thing-ness）空観〔存在の無自性〕を説くものである。(39)

そして最後の「中観派」にはさらに 'Svātantrikas' 独自論→と 'Prāsangikas' 応過論とがあるが，正しい空論は後者すなわち 'Prāsangikas' にあるとする。(40)

インド仏教における「否定」（nothingness）は否定によってむしろ世俗を「建立」し，「恢復」（begründen）することに他ならない。'Svātantrikas' も 'Prāsangikas' も共通してこのことを目標にしている。「独自」「応過」両論の立場上の相違は的確に把握することが困難とされる。しかし要は論理に対する態度如何であると見られる。(41) が基本的にはそれは「人法二無我」の問題，したがって宗教的人間形成の問題に拘わることがらであって，宗喀巴（ツォンカパ）は Candrakīrti（月称）の応過論の立場に立って人無我を主張し，人我如幻の故に無自性の立場から縁起的世間に応同し得るとし，龍樹が『中論』で説いた無自性の立場からのみ真実の智慧が得られるとした。龍樹は『大智度論』40において三種の慈悲（衆生縁・法縁・無縁）を説いている。そして無縁のそれを最勝とし，「諸仏は善く畢竟空を修行するが故に名づけて無縁となす」と言っている。大乗仏教にいう空 śūnya の思想に徹底し，自他の対立を全く撓無して既に対象のない（'no-thing-ness'）絶対慈悲を「無縁」のものとし，最高の慈悲すなわち大悲とするのである。しかし仏教用語，ことに漢訳仏教語は次第に現代人の生活や思想から遊離しつつあるのは事実である。同時に，Vivekānanda が言ったように「真理は常に一つ」である。それを哲学者は様々な名で称するのである。人間の真実形成が今日ほど急がれているときはない。問題と方法は東西文化の交流と会合帰一にあると考えられる。次回に更に進んで Tibet 仏教の宗教的正義をさぐることとしたい。(42) (Oot. 15, 1968)

註

(1) Herbert V. Guenther (ギュンター): Tibetan Buddhism without Mystification (The Buddhist Way from Original Tibetan Sources), Leiden (E. J. Brill), 1966.

(2) 諸橋『大漢和辞典』には,「西蔵」(セイザウ)の(二)に,つぎのように記しある。やや長文であるが,最も明確で信が置けるものであるから,これを全部掲げてみよう。

「チベット。行政区画の名。東北に青海省,東は西康省,南はビルマ・印度・ブータン・ネパール,西は印度のカシミル地方,北は新疆省と界す。但,民国初頭に川辺特別区域(十三年,西康省となる)が設けられるまでは,西康省の西半も亦西蔵の範囲であった。中国で西蔵といふ字を用ひたのは清朝の領有後らしく,西蔵本部の二大州である衛・蔵の蔵の字を取り,中国の西に在るところから西蔵(シーツアン)と名づけたと言はれる。故にか我国で之をチベットと読むのは甚だ妙なことで,英漢混同の変則呼称である。Tibet の漢音訳は,図伯特・土伯特・唐古特などと記されている。所謂チベット族は,中国の歴史に氐・羌・党項・吐蕃などと呼ばれて古から知られていたが,西蔵本国と中国とが直接交渉をもつやうになったのは,隋唐の際からのやうである。隋唐の際に王位に在ったソン・ツエンガムポ Srongbtsan Sgampo は,大西蔵帝国の建設を企図し,東は中国に際征して朝野を震駭せしめ,南は雪山を越えてネパールの諸王を戦慄せしめたが,図らずも仏教文化の燦然たるに驚き,終に侵略の野望を捨てて文化の吸収に努力を払ふに至った。併し,中国では,唐の太宗が文正公主を贊普(君主)に嫁せしめたのを初め,宋代にも亦好を通じて,西辺の事無きを図った。元代には其の勢力下に立ったが,明朝は西蔵に野心を懐きながら為す所無くして滅亡した。清朝に至って西蔵は未曽有の圧迫を蒙り,遂に清朝の属領となった。清朝の末,露・英の勢力が扶殖せられるに及び,西蔵は完全に中国の羈絆を脱すべく画策し,袁世凱の征伐を蒙ったが,袁の遠征失敗し,英国の保護の下に独立の名を得るに至った。併し,第二次大戦後イギリス勢力後退して,今は中華人民共和国の中に含まれる。」(第10巻, p. 290 b-c. S. 34. 4 月刊。underline, 圏点は筆者,以下おなじ)このあと同辞典はさらに Tibet の現状や文化・地理のことに触れ,「人口約百万。(註,1965年の推定では11321, 500)住民はチベット族のほか,タングート族・蒙古族・キルギス族等が遊牧を業とし,チベット語を用ひる。中心都市は拉薩(ラッサ)。宗教と政治が未分化の状態で,仏教を基とした生活文化を立てている。其の地はもと四部に分れ,康・衛・蔵・阿里といふ。衛は又前蔵といひ,蔵は後蔵といふ。地勢は崑崙・ヒマラヤの二大山脈が東に伸びて南北二面を擁し,横断山脈,其の東をさへぎり,世界第一の高原をなす。平均高度一万五千尺。其の間の稍々低い所は雅魚蔵布江及び印度河の谷で,西北部は一大草原をなし,天然の牧場である。」(同前, p. 290 c.) なお同辞典には引続き「皇朝文献通考,輿地考,西蔵」を引用しているが,これまた参考になること少なくないと考えるので全文を写しとろう。「西蔵,在二四川雲南徼外一,東西六千四百余里,南北六千五百余里,東至二四川界一,東南至二雲南界一,西至二大沙海一,北至二青海界一,至二京師一万四千余里,古西南徼外諸羌戎地,西漢魏晋間,種落無二聞一,自二吐蕃始祖鶻提勃率一,野二居析

支水西，並諸羌，據其地，歴周及隋，猶未通中国，其君長称為贊布，唐貞観八年（註，634A. D. なお聖徳太子は574-622A. D. Mahomet は570?-632A. D.）始遣使来朝，十五年，妻以宗室女文成公主，既而誠吐谷渾，尽臣羊同党項諸羌，幅員万余里，唐末漸衰弱，宋時亦号吐蕃，朝貢不絶，云云，今設輔国公三人・一等台吉一人，並因其俗，設噶隆第巴等職，其地有四，曰蔵，其東境曰喀木，其西境曰阿里，共轄城六十余，衛与喀木諸城，皆統属於達賴喇嘛（註，Dalai Lama），蔵与阿里諸城，皆統属於班禪喇嘛（註，Paṇchen Lama），別設駐蔵大臣二人，鎮撫其地，封爵承襲，及入貢之事，隷於理藩院之典属司，及柔遠司。」（同前，p. 290c～d）

(3) 筆者が尋常小学校一年生の時で，大正5年（1916）の冬頃であった。受持の訓導瀬戸達造先生は遥かに故人であるが，正規の師範卒でなく代用教員と伺っていたが，当時の国定国語教科書――幼稚園などない時代であるから，その教科書の最初に「ハタ」（旗）と出て来るのを学習したのが，余の人間として文字なるものを学び知った最初である。しかもその教師が実物の国旗を教材として教場に持込まれた時の感動に似たものが今も鮮明に記憶に残る。ついで乍ら当時の黒表紙の国定教科書は，ハタ――タコ（凧）――コマ（独楽）――マメ（豆）――マス（枡）――ミノカサ（蓑笠）――カラカサ（唐笠）――カラスガキマス（烏がいます）――スズメガキマス（雀がいます）等の順で学習させられたもので，その学恩を想うこと年と共に深いものがある。しかも筆者はその年暑中休暇に家父（芳樹）より仏説阿弥陀経の修得をせしめられ，8月下旬の新学期よりに既に朝夕のお斎（とき）参りに檀家まわりをさせられていた。年令的に6才あまりの時に漢字漢文の仏典学習を授けた亡父の恩も銘記したい。そうした時期に瀬戸訓導はどうして Tibet に関する知識を得ていられたか，全く不思議なことで且は有難い限りであった。予の記憶では，村に盛藤清蔵（もりとうせいぞう，或は清三か清造であったかも知れない）という家があり，それと同音だが「西蔵」（せいぞう，Tibet）という国があるという風なことであった。今調べると大正4年8月に河口慧海師（1866—1945）が Tibet から帰国しているので，或はその報道の因みに申されたことかも知れぬ。後年予は河口師の『漢蔵対照国訳維摩経』の研究に進んだのでここにこのことを謹記せざるを得なかった。因みに近着の広瀬宗家（正雄）編『明治百年記念，成宜園入門簿鈔』（S. 43. 4. 1 刊）中に唐川即定（からかわそくじょう）のことが出ており，「天保元（1830）年越前敦賀郡長賢寺に生。即定，即浄，則成とも書く。号を微。元治元年12月入門。慶応2年の月旦表では横田国臣と共に七級を占めている。林外の東都に遊歴するとき，塾務を託せられた。大帰の後に華族学校（学習院）真宗大学で晩年は僧職の傍郷里で漢字を教授した。大正7（1918）年歿。89才。書に長じ，越前にはその揮毫を愛蔵する家が多いといわれている。」（pp. 20-21）とあり，且口絵の写真には「慶応2年4月の月旦表」を載せ，「7級（2段目）に阿部辰之亟（横田国臣）即定。6級（3段目）に吉嗣達之進（拝山），5級（4段目）宮川玄水（河村豊州）が入っている。」と説明されている。この唐川徹と称する人が越前長賢寺の生れというのは誤記で，家父の祖母の弟になる人。筆者の生家の生れで，のち乞われて長

賢寺に入ったものである。また上掲文中「（広瀬）林外の東都に遊歴」等とあるについては角光清（かくみつきよし）著『広瀬淡窓の思想と教育』（S.17. 8. 20刊）に「明治五年壬申。林外当時政府に於て教育制度改革の事あり，咸宜園復た旧態を守る能はざるを感じ，兼ねて洋学研究に志して此年上京す，塾務は高弟唐川即定に託す。」（p. 409）を参照すべきであろう。敦賀は戦災で凡てを焼失したが，予は幸い家父の与えし咸宜園の「即定」と記した門鑑並びに即定（梨溪とも号した）の書数幅を愛蔵している。この唐川老僧（家人は常にかく称していた）は真宗大学が東京巣鴨にあった（明治33—43年）時期から清沢満之の下で漢籍を教え，故暁烏敏師らに対してもインドの須弥山説を教授した。真宗大学で唐川と同僚の林並木先生が予らの第四高校一年入学当時の担任で，且英語を授かったご縁も不思議である。林先生が教科書になされた Nathaniel Hawthorne (1804-64) の "Twice-Told Tales" (1837) は今に保存している。註①の書は，昨夏 America の Michigan University (Michigan 州 Ann Arbor 市) で The 27th International Orientalists Congress (Aug. 13～19) が開催され参加出席した折，東洋学関係書籍の展示会場で書目を知り8月13日に註文し，今年に入り Holland から到着したものである。併せ記し，学問の道の有難いことを改めて自らの胆に銘じたい。

(4) Himalayas〔ヒマラヤ山脈〕の語義は，Sanskrit の 'hima' = snow, 'alaya' = abode にある。その最高峰は Mt. Everest (8,888 m) であるが，昭和39年11～12月の間筆者が渡印の折，New Delhi から Calcutta へ Air India 機で帰還の途次，高度約10,000 m の空中から遠望したが，まさに「大雪山」であった。畏友故毎田周一氏はその母と暁烏師の感化で仏門に帰依し，多くの法友を残して昨春この世を去ったが，氏の主宰する海雲洞の機関誌名はまさに「大雪山」であった。因みに上記の旅行は Cambodia 国首都 Phnon Penh を開催地とする The 6 th World Buddhists Congress に日本代表の一人とし参加出席しての帰路，Thailand, Hongkong（香港）等の東南 Asia と India 並びに Nepal 両国に主として仏蹟の巡拝を行った場合のことであるが，New Delhi の日本大使館では松本康東大使お立合いのもと，Tibet 仮政府代表者に日本仏教徒団が携行した Tibet の学童向け運動用具，学習教材等を贈呈した際，「先年は貴国で西蔵大蔵経を刊行して下さり，且その一揃い 168 vols. を頂けたことは衷心感謝の他ない」との挨拶があった。詳細は予等で編した『日本仏教徒が見た東南アジアの素顔』（S.38. 2. 20 インド仏蹟巡拝紀行文編纂委員会発行，208P.）に載せた。

(5) 旧西康省の西半部を占める昌都地区をあわせ，1965年9月正式にチベット自治区として発足した。（中根千枝氏稿。世界大百科事典，*No.*14, p. 770）

(6) Tibet 語そのものは，中国西蔵語族 (Sino-tibetain) 中の西蔵緬甸語派に属する。梵字に模して作った Tibet 文字は，Sroṅ-btsan-sgam-po 王が，仏典将来の目的で India に送った Thon-mi sam-bho-ṭa が，在印中，婆羅門 Livikāra（或は Lipidatta）Li-byin や Devavidyā Siṃha（或は Siṃhaghoṣa）の許で学び，仏典を将来し，Tibet 文字なるものを Lantsha 体にならって製作したのが起りである。（池田澄達著，中村元

補『チベット文法入門』1965, p. 2 参照）Tibet 語は字数30，ほかに4種の母音節語がある。単音単語で横書にし，文法は中国語に近い。（諸橋『大漢和辞典』第14巻，p. 290d 並びに池田・中村編著上掲書 pp. 7～9 参照）なお Tibet 語の由来やその特色については望月『仏教大辞典』(10) pp. 641～645に詳しい。

(7) Sroṇ-btsan sgam-po 王の遺訓を集録したと伝えられる『十万宝詔』（Maṇi-bhaḥ-ḥbum）には，ボン教を評して，「病者について卜占すること，神に祭祀供犠すること，呪咀を唱えて悪霊を打ち破ること」を主にしたものと言っている。しかし仏教移入後，ボン教は著しくその影響を蒙り，更にゾロアスター教（Zoroastrianism）やマニ教 Manichaeism）の影響をも受け，教義を組織し，聖典を作成してここに原始ボン教が改められ，組織ボン教が成立したといわれる。（望月『仏教大辞典』(10) pp.999-1,000参照）

(8) 中村元教授『東洋人の思惟方法』Ⅱ，(S, 23, 5) pp. 397-430.

(9) 日本の神道儀礼には相当に多く Shamanism 的要素が残存していると考えてよかろう。この頃世間が評判にするようになった青森県下北半島の「恐山」（おそれざん）での宗教儀礼も，そうしたものに却って仏教的要素が加わったものである。

(10) 前掲書，p. 398.

(11) ラマ教は仏教の Tibet への移植によって発生した Tibet 仏教であるが，ラマ（bla-ma，喇僧と漢音写し，上師，上人などと訳す。ラマ教の僧侶のこと。bla-ma は梵語の guru に相当し，師匠の意味で，元来は学徳のすぐれた僧のみがラマと称せられたが，後には必ずしもかかる師匠たるに相応しい者のみでなく，広くラマ教における比丘形のもの一般をさす語となる）が極めて尊崇せられるのが特色で，教理的にも仏法僧の三宝の上に今一つラマ宝を立て，併せて「四宝」とする。ラマは従って社会的にも儀礼的にも最上位に位して一般に深く帰依される。中村教授のご指摘もその辺をさされるのであろう。長尾雅人教授の『蒙古学問寺』などを見てもわかるが，Tibet，蒙古などラマ教団におけるラマの数は極めて多く，男子人口の⅙以上がラマであると伝えられる。ラマの生活は，ただ寺廟内において祈禱を行ない，読誦礼拝し，また学問をするだけで，進んで直接民衆の教化に当り，社会事業をなす等のことは，一切これを行なわない。強いていえばそこに欠点がある。また広義における中国文化の特色や限界でもあろう。しかし，こうした祈禱礼拝等によって，一般の社会生活の安寧幸福が将来されるものであることを，一般人もラマも共に信じて疑わないのみならず，ラマは聖職者として自ら任じ，また一般にもかく認められ尊信される。しかも寺廟における生活は厳格な戒律によって規定され，また学問内容も，顕密両教にわたり，天文・医学等の自然科学にまで及んで頗る高度なものである。Tibet 文化は全くラマによって代表されると言ってよい。なおラマは概ね終生ラマとして寺廟に生活し，寺廟から衣食を給せられる。そして寺廟の財政的基礎は，王侯はじめ，一般の喜捨によって作られいたのであるが，中共の革命による批判も焦点は主としてそういう方面に当てられていると考えられる。（この項，望月『仏教大辞典』(10) p. o1143「ラマ Bla-ma」に負う所が多い）

(12) 現にデルゲ版 Tibet 大蔵経ではインドの論理学（因明 hetu-vidya）の書であるもののうち66部までが含まれ，尤大な中国大蔵経が『因明正理門論』『因明入正理論』などをしか収めないのと大きなちがいである。

(13) India で「空観」の説かれる根本の経は『般若経』(Prajñāpāramitā-sūtra) であるが，漢訳でも玄奘訳の『大般若』の如きは 600 vols. の大部なもので，（それ故却って『般若心経』の如き極端に小部なものが求められたと考えられる）内容的にも冗長でまとまり少ないものである。India ですでに四世紀の Maitreya-nātha が『般若経』の内容を組織的に要約し，"Abhisamayālan kāra"（現観荘厳論）として現わし，さらに Haribhadra がこれに加註したが，Tibet 人としてはこれらに依って『般若経』を理解しようとする。また「空」Śūnya の理論を哲学的に基礎づけたのは India の龍樹（Nāgārjuna 150-250頃）であるが，その著『中論』は鋭い論理を示したに拘らず体系を具えない，従って Tibet 人は『中論』そのものより，彼の学系に属する Candrakīrti（月称）の "Madhyamakāvatāra"（入中観論）を読む。この方が『中論』の思想を体系的に述べているからである。（『新・仏典解説事典』1961，pp. 152-153参照）Caudrakīrti は凡そ 560～640A. D 頃の人で玄奘が渡印して Nālanda 大寺で学んだり教授した時期はその晩年である。龍樹の『中論』(Madhyamaka-śāstra) に対する月称註 "Prasamnapadā" は現存唯一の Sanskrit 原典で，筆者らもこの書の L. de la Vallée Poussin 校訂の repinted 本で初めて『中論』を学習した。（なお最後の註，並びに拙稿「私どものすきな先生」『大法輪』S. 43，11月号 p. 97 参照）

(14) Atiśa と Tsoṅ-kha-pa との関係については必らずしも一般に言われるほど直接的でないという学者もあるが，筆者もそうであろうと思う。（羽田野伯猷「チベット大蔵経縁起（その一）ーナルタン大学問寺の先駆的事業をめぐってー」『鈴木学術財団研究年報』No.3, pp. 35-84 参照）しかし，Tsoṅ-kha-pa が Atiśa に傾倒したことは事実で彼の代表的著作『菩提道次第』(Byan-chub lam-gyi rim-pa，通称ラムリム Lam-rim) の冒頭には，Atiśa の著『菩提道灯論』(Bodhi-pathapradīpa，Tibetan tr.：Byan-chub lam-gyi sron-ma) の偉大さを讃え，その教えの継承者を以て自任していることは事実である。（『新・仏教典解題事典』p. 161参照）

(15) それまでに訳出された経論の数は 4,000余部，伝訳者（Indian 学僧，Tibetan 翻訳官Lo-tsā-ba 等）は350人ほどであったという。（『新・仏典解説事典』p.23参照）

(16) インド仏教以来，僧院での学習事項を内明（ないみょう，直接の仏教学），因明，声明，医方明，工巧明の五とし，これを「五明」 pañca-vidya とするが，Tibet の学問はそれを承け，それ以上の範囲にまでおよぶと共に，とくに内明の部分について詳細を極めたといえる。そこに仏教の思想史として或は文化史としての一貫した発展と広がりがあった。

(17) 『至元録』とも略称し，『昭和法宝目録』Ⅱに収める。

(18) 以上の諸版以外にもラマ教の流通に伴い，蒙古字や満州字による大蔵経が翻刻開版さ

れている。

(19) 厳密には text としての出版である。内容は「北京版」151 vols, の他に続篇13 vols, (宗喀巴全書, 章嘉全書, 昭37) その他で合計 168 vols, である。金沢大学法文学部哲学研究室が昭和 43年 9 月に石川県 (知事中西陽一氏) から寄贈された多数仏書 (300 万円相当) 中のものは実にこの版である。謹記して心からの謝意を表する。

(20) この最後に掲げたものは東北大学, 印度学研究会が編纂発行したもの, 印刷は仙台市の笹気出版がなしている。昭和28年 5 月, 東北大学文学部の名義で発行され, 500 部限定の印刷であったが, その貴重な一品を次の書状と共に筆者宛に贈られた。後大学に寄贈。

昭和二十八年十月九日

東北大学文学部長　金倉円照　学部長印

橋本芳契　殿

刊行物贈呈について

拝啓　時下益々御清祥の段御慶び申上げます。

さて, このたび本学部において左記目録を発刊いたしましたので贈呈いたします。

追って御受領の上は御手数ながら同封受領証に御記名御捺印の上御回送願います。

記

一, 西蔵撰述仏典目録　　壱　冊

(原文たてがき)

まねごとにせよ学究生活40年になるが, この撰述目録を頂いた時ほどしみじみ仏徳を感じ学恩を謝する思いになったことはなかった。同書は後日学士院賞受賞の対象になったが, 編纂者金倉円照・山田龍城両博士・故多田等観師および羽田野伯猷教授ら 4 人のうち, 羽田野博士はことに筆者の高校 (四高) 2 年の後輩という宿縁がある。そしてこの目録作製の仕事そのものも「緒言」 Introduction が和英両文とも同氏の筆名であることによって示されるように必らずや同教授の尽大な努力に負うものであろう。氏自身は自分は Tibetology の専門家でない, 印度哲学者であると強く自任しているようであるが, そのままが日本の東洋学を世界的水準にいよいよ高めている所以に他ならない。

(21) 'Gsaṅ-ba Kun-gyi gnad rnam-par phye-ba shes-bya-ba' ともいわれ「勝者普遍主大金剛持の道次第, 一切秘密精要の開顕」の義である。

(22) 1949 年の出版で極めて豪華なものである。上質の用紙に印刷され, 750 部限定の copies で数年前に金沢大学暁烏文庫の費用で購入したものはそのうち 'Number Specimen

424' であった。この書の紹介については別の機会を期したい。

(23) "A Study of Tibetan Buddhism"S. 29 (岩波)

(24) 「中国・朝鮮・日本」系の「中観仏教」として三論宗祖吉蔵の『中観論疏』10 vols. が代表的且基本的なものと考えられるが，昭和42年10月に「国訳一切経」和漢撰述部の1冊としてその上半（1～5 vols.）だけが配本された。訳者は宮本正尊・梶芳光運両博士と泰本融の三氏であるが，同年「8月12日（土曜）渡米の日の正午記す」と後記された宮本博士の「中道研究について」はじめ，40頁におよぶ長文の三氏の「中観論疏」解題は古今と内外にわたる三論宗系中観仏教の最もすぐれた概観である。

(25) 高崎直道氏稿『新・仏典解題事典』pp. 160-161 所収解題参照。

(26) レティンは地名で，Lha-sa の北々東 60 miles, Skyidchu 河上流の一支流の峡谷辺にあり，レティン寺は Atiśa の死後，その弟子たちによりその地に建てられた僧院。甘丹派は Atiśa の高足 Ḥbrom-ston が開創した教派。またゲールク派（Dge-lugs-pa）は Tsoṇ-kha-pa によって改革された Tibet 仏教の新派である。この改革に追随しなかった古来の堕落したままの密教を奉ずる流派をニンマ派（Rñin-ma-ba）という。さらにガンデン（Dgaḥ-ldan）寺は甘丹寺と音写し，「喜び」とか「善」とかを具する最勝の寺院の意味で，また兜卒天の義ともされる。Lha-sa の東北40Kの地に Ḥbrg-ri-bo-che（大トク山）に倚ってたち，Se-ra, Ḥbras-spuṇs 両寺と並びラマ教黄帽派（黄教）の「三座」，或は Bkra-śis lhun-po 寺を加えて「四箇大寺」とするものの一。すなわち宗喀巴が53才頃創建し，彼が63才（（1419A. D.）で死ぬまで住した。寺名としてはそうであるが，黄帽派としては派名を Dgaḥ-lugs-pa（ガールクパ）としたのでは dgaḥ（喜び）に快楽的意味が加わる恐れがあるとして，のち Dge-lugs-pa（徳行派）に改めた。

(27) 前掲長尾教授の著は，前後の2部から成り，第1部では Tibet 仏教，とくに Tson-kha-pa の仏教を概論し，第2部は全てを『菩提道次第論』の「止」章以下和訳に当てたものである。

(28) 筆者はとりあえず第27回日本宗教学会学術大会（昭43. 10. 6日，武蔵野女子大学）において「H・V・Guenther の仏教観——チベット顕教について——」の題下に研究報告をおこなった。なおその折，京大の長尾教授から教示にあずかり得た所では，ギュンター教授は Austria の生れで，India にも長く滞在し，現在 Canada 国にある相当年配の人であるとのことであった。

(29) Blo-bzañ は Candra Das : Tibetan-English Dictionary p. 905 に，'noble-minded' とある。

(30) under line は何れも筆者。

(31) 広論中そこで訳出されたのは，序論・真実空性の決択・誤れる空論と正しき空論・否定と応過・独自の両論・人法二無我・毘鉢舎那の諸相・結論の前後7章（同書 pp. h99-404）である。

(32) 『望月仏教大辞典』（9）pp. 118b-119c参照。（以下同じ）

(33) 班禅喇嘛 (Paṇ-chen Lama) は Bkra-śis lhuṅ-po (タシルンポ) 寺の化身ラマである。同僧院は Btsoṇ-kha-pa の弟子 Dge-ḥdun-grub-pa (1391-1474) が Gshi-ga-tse に建てたもので，この建立者が後に Dalai Lama として尊崇されるのである。(Dalai は rgya-mtsho の蒙古訳で「海」を意味する。つまりタシルンポ僧院を創めた初代 Dalai Lama のあと，その系統は次第に栄え，第5代に至り Tibet・蒙古にわたり政教両面で君臨する大勢力となるが，既に第3代 Bsod-nams-rgya-mtsho の時招れかて蒙古に移り，そこのアルタンシチから Vajra-dhara Dalai (持金剛) の称号を与えられて，却ってタシルンポ寺に留まった系統のものは別に Paṇ-chen と称せられることになったのである。16c. 頃のことである。ついでながら，Dalai Lama は観音ボサツの化身とされるに対し，Paṇ-chen Lama は阿弥陀仏の化身とされる。

(34) これらの将来品は「美術資料」第1・2 (大6) に記載され，ナルタ版・デルゲ版・チョーネ版・写本の各西蔵大蔵経はじめ，とくに蔵外仏典をも多数含み，本邦学界は一躍して豊富な Tibet 研究資料を得ることになったのである。

(35) 私事になるが，筆者らが昭和初期に維摩経研究への関心を深めたのはこの在家仏教の風潮に推されたものと考えられる。また慧海自身もこの経等の深い理解を通じて「在家仏教」の道に踏み切ったものに相違ない。

(36) 慧海将来品中，梵文仏典写本は東京大学に，西蔵大蔵経及び Tibetan books は東洋文庫や大正大学に分蔵されたが，一部関東大震災で失われたものもある。

(37) 戦後に出来た『望月仏教大辞典』(9)(10) の両補遺編は合計1,208頁の大冊であるが，極めて豊富な Tibet 仏教資料を収めている。これなども河口がその根基を培った日本における Tibetology の賜と称してよい。

(38) 例せば19, 37, 85, 97,107 の各頁及び p. 99 note$_1$ 参照。今夏イギリスの Dorchester における Thomas Hardy (1840-1928) の記念大会に出講の大沢衛金沢大学法文学部長の草稿"Hardy in Japan" (金大英文学会誌 *No.*11, 1968) の pp. 9-10 には人間の運命や宿業の問題に触れ，その中には次の様に 'Lovingkindness' の言葉が見えて教授の大乗仏教や，少なくとも宗教への大きな関心が窺われる。海老池俊治氏によれば，Hardy の思想は，「人間は自身の意志のいかんにかかわらず，宇宙を支配する盲目な (内在意志) にあやつられる」(世界大百科辞典 18, p. 177c) という Schopenhauer 風な，従って東洋哲学的な考え方であったようである。

Chance weaves Fate, and the woven Fate begets still another Chance. (筆者註，chance は縁，fate は因と考えてよかろう) This reciprocal process is repeated endlessly in what we call '*in-nen*'. This derives from the Buddhistic term, *Carma*, (註，Karma業), which means accumulated-Behaviours-ever-accumulating-and-effecting. This is nothing but, in Hardy's phrase, Life's Little Ironi es And according to Nishida (註，西田幾多郎), we may take it for granted the most touching of Hardy's themes is centred on the *Carma* of human behaviour.

'Lovingkindness', thus, begins to assert itself as the only virtue counteracting Fate. While we know that 'Lovingkindness' is produced by the dark *Charma*, we cannot but cherish a hope that it will grow more and more, in depth and in width, in the humam heart, just as the Spirit of Pities prayed earnestly in *The Dynasts*.

大悲心の問題は大乘仏教の根本的特色と考えられ，予も亦「大悲為本の真理——維摩経義疏の思想的特色」（日本仏教源流研究紀要 I pp. 18-44, S. 37）「僧肇における大悲心の問題（上）（下）」（印度学仏教学研，16-2，pp. 68-72 及同17-1）等で一連の考察を行なってきた。Tibet 仏教の第一義も亦，けだし大智 mahāprjñā による大悲 mahākaruṇā（利生化他）の心行に他なるまい。真言宗において正依とする大日経では「菩提心を因と為し，大悲を根と為し，方便究竟す」というのである。（拙著『維摩経の思想的研究』第六章「維摩経の密教思想」pp. 93-105参照）

(39) H. V. Guenther : "Tibetan Buddhism without Mystification",p. 9 参照。

(40) ibid. p. 88. なお既掲の長尾雅人教授『西蔵仏教研究』第二部「菩提道次第広論」毘鉢舎章和訳（p. 99-446）はいわゆる 'Lam-rim' (Stages on the Path, ibid, pp. 80-81. 宗喀巴は『ラムリム』の道からやがて『ガクリム』の世界に移る。それが密教の世界であるに他ならない）の極意たる部分の訳出で，インド・Tibet・日本を通じて「中観仏教」の研究に関しては最も光彩あるものである。

(41) 長尾教授，上掲書 p. 88 参照。

(42) 中観学派の前の瑜伽唯識学派での Dharmapāla（護法530-561）等の進歩した思想は玄奘（602-664）によって漢土にも導入されたが，これに匹敵する中観学派の進んだ考え，殊に後に至っては瑜伽唯識の思想をも自らの中に併合したと思われる中観思想は，遂に漢土に知られず，漸く Tibet 仏教の究明と共に世界の学界に紹介され，そうした基礎的学問の確立の上にこそ真の密教学があるということで Dalai Lama 八世が真摯強力に Tibet 学者 Guenther に訴え，彼も亦，まさしく 'Without Mystification' の名で Tibet 仏教を明確にしようとしたものと考えられる。玄奘がインドから中国に齎らした Nālanda 寺（大学）の瑜伽唯識学は該寺における諸説対立のままの紹介では混乱するとしてか護法説を中心にして十家の義を合糅して『成唯識論』10 vols, としたものが法相宗の正依となった。曾て玄奘新訳出の『維摩経』たる『説無垢称経』に対する慈恩大師の註釈書『説無垢称経疏』を閲読した折，護法と清弁（Bhavya, Bhāvaviveka 490-570年頃）の対立した見解の紹介されているのを見た（拙著，『維摩経の思想的研究』第12章「法相宗と維摩経」pp. 167-191参照）。清弁はすなわち 'Svātantrikas' の開祖である。したがって法相宗義には 'Prāsaṁghikas' の系譜に属するもののあることが察知される。Tibet には伝えられたが遂に漢土に伝わらなかったとされる Candrkīrti の "Prasannapadā" は昭和7年4月に恩師宮本正尊教授から初めて教示を受けたものであるが，その後40年近い歳月の経過ののち漸く『維摩経』（蔵訳 dri-ma med-par grags-pas btsn-pa）の研究

を通じて心ばかりそれにアプローチし得たことは且は深く自ら慚づる所であり且は大いなる欲びとする所である。

金沢大学に「海外文化交流委員会」が設けられ，特に Univ. of Pennsylvania（ペン大）との間に sisterhood の実現した当初に同大学の Dr. E. Dale Saunders から予に対し本学図書館が所蔵する真言宗密教（Esotericism）関係書の list の送付を求められた。同教授は Sorbonne 大学から Esotericism の研究によって学位を取得した人で，予の最も親しい米人学者の一人だあるが，同氏のその後の研究が同氏近著 "Buddhism in Japan-With an Outline of Its Origins in India" 1964 を参照しても主として日本の庶民信仰に関する方面に向って，Tibet の大乗仏教，特にその顕教方面の研究に進もうとされないかに見えるのは残念である。しかし日本の密教そのものが庶民性の上に立っている事実は如何ともしがたく，そこに Tibet 顕教の研究こそが真正な宗教哲学への道であるということを逆説のようであるが言えそうである。なお Guenther 教授が新著に参照した欧米の諸文献については次回にのべる。筆者が昭36のインド旅行に際し入手した Delhi で発行のP. V. Bapat 教授編 "2500 Years of Buddhism" (Foreword by S. Radhakrishnan, 1959) には Tibet 仏教もしくは密教について Rahul Sankrityaya (Ācārya Dīpaṅkara Śrījñāna の題下に pp. 225-238), Anagarika Govinda (Principles of (Tāntric Buddhism の題下に pp. 357-374), そして続いて H. V.Guenther その人 Mantrayāna and Sahajayāna の題下にpp. 374-379) の三人が各分担執筆している。この書は東南 Asia や欧米の仏教にまで行届いた現代仏教についての概観を与えた良書である。